

柿右衛門様式研究

—延宝期における肥前磁器の文様表現について—

松浦 里彩 國學院大學

柿右衛門様式とは、17世紀中期～後期にかけて隆盛した、肥前磁器の様式である。独特の乳白色の素地(濁手)の上に繊細なタッチで文様が描かれ、赤や青、緑、黄色といった明るい彩色による上絵付けが施されている。この華麗な色絵磁器は、西欧諸国にも盛んに輸出され、とくに彼の地の王侯貴族の憧れとなってきた。

柿右衛門様式の絵付けはしばしば絵画的であるといわれ、その技法や構図から、絵付師として狩野派や土佐派の絵師の関わりも考えられている。しかし、柿右衛門様式の装飾意匠に関し、例えば文様の描き方や余白のとり方など、細部に渡って具体的に検証される機会はなかったといえよう。本研究は上記の状況を踏まえ、主に装飾における「文様」と「構図」の2点を軸に分析し、柿右衛門様式の成り立ちとその枠組みを再考するものである。

発表者はこれまで、江戸初期から幕末までの有田磁器を有する「柴田コレクション」(佐賀県立九州陶磁文化館蔵)を中心に、約4000点を対象に文様分析を進めてきた。中でも、17世紀後期の「色絵双鳥松竹梅文輪花皿」は、余白を多くとった構図やモチーフ選択の上で、柿右衛門様式の特徴に合致するもっとも代表的な作品であると考えている。今回はこの作品を中心に、柿右衛門様式の成立と展開に関わる複数の作例を含めて、主に絵付けに着目し、柿右衛門様式の装飾世界を成り立たせる要素の一端を明らかにする。

その方法として、器物に絵付けされたモチーフを文様の種類、形態ごとに分類し、特徴を抽出する。この分類作業で発表者は、まず柿右衛門様式の主文様である、松、竹、梅をはじめとする花鳥文様から計9種類のモチーフを分析し各々の特徴を抽出した。その結果、松の幹を青色で彩色する点や、梅の花弁を丸形の集合体で表現する方法など、モチーフの彩色・形態表現にそれぞれの傾向があることを認めることができた。また、竹の表現は、切断面の輪郭線をとらず素地に溶け込むように描く傾向があり、このような細部にみられる表現方法が、柿右衛門様式の余白の表現世界を成り立たせているのではないかと考える。

さらに、同時代の絵画や工芸品と柿右衛門様式の作品との比較を行った結果、余白を多く用いる構図は両者に共通する表現であることがわかった。従来、柿右衛門様式の大きな特徴とされてきた図様のあり方が、陶磁器の分野にとどまらない、延宝期の造形文化全般に関わる時代様式であることもあわせて指摘したい。

以上を踏まえ、本発表では、西欧の作陶にも大きな影響を与えた柿右衛門様式の装飾世界について、文様の表現や余白を多くとる構図の成立要素を探ることで考察する。そして、これらの研究により導き出される成果が、柿右衛門様式作品の制作年代、さらには生産窯の推定の一助になる可能性についても言及したい。

(まつうら・りさ)